

*Medieval Music, Legend, and the Cult of St. Martin:  
The Local Foundations of a Universal Saint,*

Cambridge, Cambridge University Press, 2014, 318p., \$99.99.

私事で恐縮だが、私は本書の舞台となるトゥールに留学していたことがある。しかも、私が学んでいたルネサンス高等研究センター(CNSR)は、聖マルティヌス(サン=マルタン)と縁が深い場所にあった。当時の生活が思い出される。 스튜디오を出て、観光客でごった返すブリュムロー広場を尻目に、人通りもまばらなデ・アール通りに入ると一呼吸。まわりをぐるっと眺めてみる。この通りには2つの遺構がある。右(西南西)には「時計塔」Tour de l'Horlogeが、左(東北東)にはすぐ「シャルルマーニュ塔」Tour Charlemagneが聳えている。これら2つの塔はそれぞれ中世のサン=マルタン教会(佐藤彰一氏の研究でも著名な修道院が829年に参事会聖堂に改編されたもの)の遺構で、前者はファサードの南側、後者は翼廊北側の塔であった。また多少角度は異なるが、デ・アール通りは身廊部分に相当する。これら二つの塔と、19世紀後半から20世紀初頭にかけて建立された現在のサン=マルタン教会(旧教会の後陣と翼廊の南側にあたる)を結べば、かつて存在した教会の空間を容易に思い描くことができるのである。いにしへの教会にしばしの思いを馳せた後は、味気のないネオ・ローマ=ビザンツ様式の現教会の脇を足早に通る過ぎ、かつての参事会員の邸宅であったというルネサンス高等研究センターの門を叩いたのであった。

留学中、この教会の音楽について調べてみたいという欲求に何度もかられたが、カンブレ大聖堂に関する博士論文を執筆中であるという自分の立場をわきまえ、文書館で目録を少し調べる程度で、あえて「浮気」はしなかった。よって今回、聖マルティヌス信仰とトゥールの音楽に関する初の本格的な研究書が出版されたのを知り、喜び勇んで手に取った。著者はシカゴ大学で博士号を取り、現在はヘブライ大学で教鞭を取るヨッシー・モーレイ氏で、神学、音楽、写本文化、イデオロギーが交錯する場としての儀礼に注目する気鋭の研究者である。本書は上記の学位論文に基づいており、広範な史資料の分析に歌)《弟子たちは述べし》Dixerunt discipuliを定旋律とし、その歌詞自体には聖マルティヌスの軍功に関する記載はまったくないものの、旋律においては著名な《武装した人》L'homme armé(作者不詳の世俗歌曲をもとに多くミサ曲が作られた)と明確な関係があるとされる。

掘りつつも、明晰かつ平易な文章で論じられている。さて、テーマとなる聖マルティヌスだが、これはきわめて珍しい聖人である。ローマ帝国の軍人家系に生まれた彼は、軍籍に身を置きつつも、キリスト教思想に惹かれ、アミアンでの著名な「マントの伝説」(物乞いに自身のマントを切り裂いて与えると、夢にそのマントを羽織ったキリストが現れたという出来事)を機に洗礼を受け、軍を離れる。そして、ポワティエ司教ヒラリウスのもとで学んだ後に、トゥールの司教となり、数々の奇跡も起こす。こうしたその生涯と事績は、弟子のシュルピキウス・セウエルスが記した『マルティヌス伝』(『中世思想原典集成4』に所収)によって人口に膾炙し、トゥールにはそのウィルトゥス(霊力)を求める巡礼者が殺到する一方、フランク王国、カペー朝の諸王は彼を守護聖人と仰ぎ、上記のマントは礼拝堂(カペラは彼のマント cappa を語源とする)において大切に保管され、戦時の祈願に用いられた。

モーレイの研究は、こうした特異な聖人にまつわる儀礼とその音楽の特徴を、ローカルなレヴェル——サン=マルタン参事会聖堂、サン=ガシアン司教座聖堂、そしてロワール川の対岸に位置し、聖マルティヌス自身が成立したマルムティエ修道院を中心とする都市トゥール——と地方レヴェルを超えた普遍的な次元を対比させながら論じる。前者について、例えばトゥール市立図書館所蔵159番写本(サン=マルタン教会伝来の14世紀の聖務日課書)に含まれるプローサ(セクエンティア[続唱]に付される二行連句の歌詞)では、セウエルスが伝える聖マルティヌスの著名なエピソードのうち、その身体的な脆弱さや死の情景、残される弟子たちの悲哀が強調されると同時に、他の教会に対する霊的優位性も密やか主張される。他方で、グローバルなレヴェルにおいては「平和の調停者」あるいは「騎士」としての特性が強調される。例えばヤコブ・オブレットの《聖マルティヌスのミサ》(1486/87年)は、上記の159番写本に含まれるアンティフォナ(交唱

本書は、「司教」でかつ「修道士」であり、また「戦士」で教皇とも密接な関係をもっていたとされる聖マルティヌスが、多面的な中世文化の重要なトピックスであったことを再認識させてくれた。

(山本 成生)